
そして彼女は彼氏の元へ行く

karma

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そして彼女は彼氏の元へ行く

【NZマーク】

N1551E

【作者名】

karma

【あらすじ】

夜の11時17分最終の一つ前の電車に乗るために駅のホームに俺と彼女は立っている

プロローグ（前書き）

この小説は作者の体験を元に多少の脚色を加えながら執筆しています
この物語のラストがハッピーエンドで終わるかバッドエンドで終わ
るかはまだ未定です
末永く見守つていただけすると幸いです
これからよろしくお願いします

プロローグ

夜の11時17分

最終の一つ前の電車に乗るために駅のホームに俺と彼女は立っている

次の電車が来るまであと3分ある

その間、俺は彼女と何を話そうと迷っていた

もともと俺は口下手で専ら人の話しの聞き手にまわる人間だ

そんな俺が彼女とつまく話そななんていうのが間違ってるのかも知れない

俺とは対象的に彼女はよく話す

今日あったこと、楽しかったこと、明日は何をしようか

さあやまな事が彼女のふくらとした頬から出てくる

「あつ・・電車がきた」

彼女がふいにやつした

彼女の顔はまだ少し離れたところにある光を向いていた

彼女を横目に携帯電話の時計を見てみるとすでに23時21分と示していた

俺はこの3分間結局何も言えずにしてしまった

そんなことを考えてるうちに電車がホームに入つてくれる

「それじゃまたな」

そう言つて彼女は電車に乗り込もうとする

「・・・またな」

はつきりと言つたはずが俺の声は彼女に聞こえるか聞こえないかぐらいの小声になってしまった

少し喉を痛めてるせいいかしゃがれ声になつている

そんな俺の声に気づいたのか彼女は乗り込む前にこちらを向きかけたが

電車に乗り込もうとしてる人が後ろにいたので振り返らずに乗つてしまつた

電車の中は最終の一つ前のせいか人がそれなりに乗つていて彼女の姿は見えなかつた

俺はそんな電車をじつと見ていたが電車は俺になんか興味はないようだアを閉めて発車する

「またな」

発車していく電車に向かつて誰もいないホームで独り言をつぶやいた

出会い・1

俺が初めて彼女と出会ったのはまだ12歳のころだった

俺はその頃、中学校に上がったばかりで身長も今より随分小さかった
たしか140センチもなかつたんじゃないだろうか

そんな俺は入つたばかりの学校でまだ新しいクラスに慣れていなかつたせいか遊べる友人も少なかつたし

学校が終われば習い事の塾と水泳教室が俺を待つていたので放課後も友人とつるんで街に遊びにいくこともなかつた

その日は塾がある日だったので俺は家には帰らずに塾に直行した
塾は俺の家から車で10分くらいのところに学校からは20分といつたところにあつた

親は俺が心配だつたのだろう

いつも送り迎えをしてくれてその日も学校へむかえにきて塾まで送つてくれた

「こんにちわ」

塾に着くと塾長が玄関のところにタイミングよく通りかかつたので俺にあいさつをしてきた

「」にちわ

俺も軽く会釈をしながらあいさつをする

塾長は40歳くらいの中年の人だつたがからだが大きく身長は180センチ近くあつたと思つ

身長差もあつてか随分大きく見え、顔も少し厳つい顔だつたので俺はその塾長に苦手意識のようなものを感じていた

「もうすぐ授業が始まるからはやく教室に入りなさい」

そう言って塾長は次の授業があるので講義室に入つていった

時計を見ると自分の授業もあと5分で始まつてしまつ

俺は急いで靴を脱ぎ自分の教室に駆け込んだ

「おひす」

教室に入ると友人が俺に片手をあげてあいさつをしてきた

その友人の隣はだいたいいつも俺が座るので空いていることが多い

案の定今日も俺の指定席は空いていたのでその席に自分の鞄をおいた

「よお、今日の宿題ちやんとやつてきたか?」

いつものように友人に話しかける

「ほとんど終わってるけど3番目の問題が難しくて解けなかつたよ

「ああ、確かに難しかつたよな。俺、ねえちゃんと教えてもらつたから終わってるぞ。見るか?」

そうやつて友人に宿題を解いたノートを見せてやつてそれを友人が必死に自分のノートに書き写してゐるなか

俺は教室に違和感を感じる

俺の席は教壇の前から3席空けて4席目の教壇から見て一番左端にすわつてゐる

4席目は狭い教室のなかで最後尾になるので前に誰が座つてるかわかるのだ

塾で講義を受けている生徒は学校は違えど、ほとんどのものが小学生のときから通つてゐるので

生徒たちはクラスのメンバーをほぼ把握している

だが今日は一人多いようだ

教室に入つたとき友人に目がいついていたのでその存在に気づかなかつた

「なあ、あの子誰?」

俺は必死にノートを写してゐる友人に問いかける

「ああ？」

友人が顔をあげてこちらを見上げてきたので俺はその子に向かって指差した

その子は教壇の前から1席空けて2席目の教壇から見て一番右に座つていた

「いや、俺も知らねえ。俺も教室に入ったとき気づいたけど話しかけてないからな。」

友人もわからないと首を横に振りまたノートを写しだした

俺は少しその子のほうを見ていたが新しく塾に入るのか体験に来たのだろうと考えその子のことを考えるのはやめた

少しすると教室の扉が開き先生が入ってくる

先生は教壇にあがりいつものようにあいさつをした

「こんにちわ」

「こんにちわ」

先生のあいさつに生徒も全員あいさつをする

「それじゃあ、先週の宿題のチェックからしたいけど先に新しく入った人を紹介するね」

先生はそう言ってその子に顔をむけた

「橘さん、前に来て自分の自己紹介をしてください」

その子は名前を呼ばれたので、自分の席を立ち教壇のほうへ歩いていく

少し緊張気味なのが早歩きになっていた

教壇の横にたつとその子が俺たち生徒側を向いたので顔がはつきりとわかる

眼はすこし釣りあがつて見えたが鼻はまっすぐに通つていたし唇もふつくりとしていて顔の輪郭も女の子らしく少しおかつた丸かつた

眼だけを見れば少ししきつそうな感じだが、顔は美形の部類に入るだろ？

俺はかわいいなと思った

「たちばな 橘 恵子けいこ です。八代中学からきました。よろしくお願ひします。」

そいつ言って橘さんは頭を下げてあこがれをした

「それじゃあ橘さん、席にもどつてください。橘さんは先週の宿題をできるわけないのでいまから僕がする解説をノートに写してください。それでは宿題の解説しながら解くのでよく聞いてください。」

「

先生はそつ言って講義を始めた

俺はまだ彼女を見ていた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1551e/>

そして彼女は彼氏の元へ行く

2011年1月15日22時51分発行